

『実例詳解古典文法総覧』補遺稿

連載第45回 第10.4.4節～第10.4.6.1節

2019年11月1日

小田 勝

308頁「10.4.4 副詞の重複使用」。用例(5)～(8)の類例を追加する。

- ・将軍、やがてすぐに内裏へ参る。(小島のくちずさみ)

次例は、「あまた」が「子供たちの数が多い」の意で、「ここら」は「おとなび給ふ」を修飾するのだろう。

- ・中宮には、宮立ちさへあまたここらおとなび給ふめるに(源・宿木)

現代語で、「あとで後悔する」「いちばん最初」「いま現在」「二度と再び」「余分な贅肉」「従来から」「思いがけないハプニング」「射程距離」などは、よく聞かれる重言(に由来する表現)であるが(必ずしも誤用であるとは言えなからうと思う)、古代語では、「またのつとめて(=翌朝)」(大和173)という言いかたがあった。

309頁「10.4.5.1 転成副詞」。「あいなし・いかめし・いたし・いみじ・かしこし・こちたし・ゆゆし・わりなし」などの形容詞は、連用形になると、固有の意味を失って、単に程度がはなはだしいの意(「とても・非常に・たいへん」の意)としても用いられる(現代語でも「ひどい→ひどく」「恐ろしい→恐ろしく」のような例がある(小野正弘1997))。

- ・頭の中将を見給ふにも、あいなく胸騒ぎて(源・夕顔)
- ・…とおほかたにのたまふを、入道はあいなくうち笑みて(源・明石)
- ・風吹き、波荒ければ、船出ださず。これかれ、かしこく嘆く。(土佐)
- ・男はうけきはらず呼び集へて、いとかしこく遊ぶ。(竹取)

「きよし(「汚れがなく清らかである」意)」の連用形「きよく」は、「残るところなく、すっかり」の意で用いられる。

- ・また人の問ふに、きよう忘れてやみぬる折ぞ多かる。(枕257)

用例(5)については、「はや…けり」の形もある。

- ・白雲のかかると見ゆる宿ははや花の盛りのよそめなりけり(為忠家後度百首)

同頁「10.4.5.2 二語以上の語句の副詞化」。動詞連用形に接続助詞「て」を付けて副詞化するものが広くみられる。本書に掲示の「からくして・たえて・せめて」のほか、「敢へて・至りて・おしなべて・重ねて・かねて・^{かへ}却りて・^{きは}極めて・定めて・^と強ひ

て・すべて・立てて・初めて・はたして・まして・別きて」など。また、

・男、法師の子ども、数を尽くして (=悉ク全部) 諸国へ流してけり。(愚管抄)
のような、副詞的慣用連語というべきものもある。例えば、「飽くまで・剩へ・頻りに・もとより・論無う」など。

310 頁「10.4.6.1 副詞の「-と」語尾、「-に」語尾の分出」の類例をあげる。

- ・ a 奥山のしきみが花の名のごとやしくしく [之久之久] 君に恋ひわたりなむ (万 4476)
- ・ b 奈呉の海の沖つ白波しくしくに [志苦思苦尔] 思ほえむかも立ち別れなば (万 3989)

「-に」語尾も「-と」語尾もとる例としては、第 10.4.1 節の用例(7)のほか、次のようなものがある。

- ・ a はるばると雲井をさして行く舟の行末遠く思ほゆるかな (拾遺 1160)
- ・ b はるばるに君をやりては逢坂の関のこなたに恋ひやわたらむ (躬恒集)
- ・ a つれづれとながむる空の郭公とふにつけてぞ音はななけれける (後撰 185)
- ・ b つれづれに何か涙の流るらむ人なむ我を思ふともなく (古今六帖)
- ・ a ほのぼのと明石の浦の朝霧に島がくれ行く舟をしぞ思ふ (古今 409)
- ・ b ほのぼのにひぐらしの音ぞ聞こゆるこやあけぐれと人は言ふらむ (実方集)

310 頁最初の◆は、語例に「事と」を追加する。形容詞語幹の反復に「-と」を付けて副詞化する造語法もある。

- ・ 御髪御爪長々として (保元・金刀比羅本)

これで「第 10 章 形容詞と連用修飾」の補遺稿を終えるが、ここで、これまでの分の「補遺稿の補遺」を少し書いておこう。

「2.2.8.3 動詞を作る接尾辞」の 38 頁、「⑥-ぶ (上二段)」の語例のうち「あはれぶ」「あやしぶ」「いつくしぶ」は四段活用なので削除、「⑦-む (四段)」の語例のうち「否む」は上二段活用なので削除する。また同じ⑦の「うるはしむ」を削除する。⑦の語例のうち、「赤む・怪しむ・危ぶむ・痛む・疎む・軽む・黒む・響む・和む・僻む」は、下二段活用の他動詞形もある。52 頁「2.6.3 「に」格も「を」格もとる動詞」に「愛づ」を追加、53 頁の最初の◆の「に」格も「と」格もとる動詞に「似る」を追加する。84 頁用例(7)～(10)の類例をあげる。

- ・中納言(=薫)はこなたになりけりと[句宮は]見給ひて(源・早蕨) <「こなたにおはするなりけり」ノ意>

142 頁用例(3)の「…ゆく」であるが、複数主語に用いられると、「次々にその動作が起こる」意を表す。

- ・皆人のそむきゆく(=次々ニ出家シテ行く)世を(源・鈴虫)

142-143 頁「5.4.5 局面を表す名詞」では、次のような例もあった。

- ・深草に住みける女をやうやう飽きがたにや思ひけむ(伊勢 123)

143 頁「5.4.7 結果の含意」の類例は多いから、これ以上あげるまでもあるまいが、有名な箇所にもあった。

- ・暗うなりて、[翁丸(犬)ニ]物食はせたれど、食はねば(枕 6)

154 頁用例(17)の類例を追加する。

- ・六条院の御いそぎは、二十余日のほどなりけり。(源・藤裏葉)
- ・昨日今日と思ひ給ふるほどに、御はて(=紫上ノ一周忌)もやうやう近うなり侍りにけり。(源・幻)

188 頁の⑥では、準体言の例を追加する。

- ・むげにもの参らざなる₁こそ、いと悪しけれ。(源・宿木)

※SNS 上で、本書の用例の末尾に(必要と思われる、ごく少数の場合にのみ)付してある「<大宮→源氏>」のような表示に、疑義が出ていることを知った。本書のこの表示は、ii 頁の凡例 8 にあるように、会話の主が大宮で、その聞き手が源氏であるという、つまり「大宮から源氏への詞」ということを示したもので、「敬意の方向」を示したものではない。特に敬語の章において、誤解を生みそうな表示であったと反省するが、とにかくそのような仕様で作ってあるので、どうかご理解を賜りたく存ずる次第である。本書が多くの読者にお使いいただいていることを感謝申し上げます。

次回から、「第 11 章 名詞句」に入る。

[出典追加] 小島のおじまのくちずさみ①二条良基(1320-1388)②1353年の日記③新大系 51

[引用文献追加] 小野正弘 1997「形容詞連用形における意味的中立化」『日本語文法 体系と方法』ひつじ書房